

① 資料1から明らかになったこと(分析結果)

- ・2年生の2学期末にピークを迎える。
 - ・全体の69%は、1年生の2学期末までに発現する。
 - ・どの学年でも、5月や10・11月のように同じ月に上昇する傾向が見られる。
 - ・各学年とも、2学期に急上昇する。
 - ・学年が上がるときに大きく減少する。
- などが明らかになった。

(2) 全体の69%を占める1年生で不登校になった生徒について欠席の詳細を調べた。

資料2 (一部を掲載)

1年生氏名	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	欠席	遅	早
aさん	0	0	1	1	0	2	5	8	13	19	14	63	11	1
bさん	0	0	1	1	2	0	3	3	7	7	12	36	0	0
cさん	1	0	1	1	1	2	1	2	4	8	9	30	1	3
dさん	0	0	0	2	4	3	1	0	6	5	12	33	2	0
eさん	0	0	2	2	6	4	8	3	8	2	0	35	34	3
fさん	0	2	0	0	1	1	6	9	7	3	3	32	0	0
gさん	1	1	3	2	6	10	7	5	2	5	1	43	5	0
hさん	0	1	2	0	4	6	8	1	5	2	1	30	48	0
iさん	0	0	0	2	0	1	1	1	1	12	17	35	11	1
jさん	0	0	0	1	0	1	0	1	8	10	10	31	6	2
kさん	0	1	1	1	2	16	12	15	12	5	7	72	16	14
lさん	0	0	0	1	2	2	2	9	12	13	5	46	52	3

① 資料2から明らかになったこと(分析結果)

- ・1学期から不登校の予兆と考えられる1~2日の「ポツポツ欠席」がある。
- ・約60%の生徒で、2月・3月に再登校の傾向が見られる。
- ・私たちが「不登校の早期ではないか」と感じてきた月4~6日の欠席のない生徒が一定の割合(約20%)で存在する。

4 学校の well-being を目指した取り組み I (令和4年度、5年度の取り組み)

(1) 既存の学校からくるストレスを軽減するために以下のような取り組みを行った。

- ・校則改正(生活指導委員会)
 - ・学生服改定(新制服検討委員会)
 - ・宿題、課題の見直し(学習指導委員会)
 - ・授業のDX(GIGA スクール構想推進委員会)
 - ・定期考査改革(学習指導委員会)
 - ・マルチトリートメントの排除(学校経営方針)
 - ・校務のDX(学校教育改革推進委員会)
 - ・別室指導の充実(別室指導委員会)
 - ・時程の見直し(学校教育改革推進委員会)
- など多くの「学校の当たり前の見直し」を図った。

(2) 令和4年度、5年度の取り組みの結果

令和3年度末の不登校の割合は6.98%だった。取り組みの結果5年度末には5.47%まで減少し、-1.51%で不登校全体の22%を減少させることができた。

この結果は、減少したと捉えることもできるが、思ったほど減少しなかったともいえる。これは、子どもたちのストレスのもとになっているストレスのうちのいくつかが軽減・除去されたとしても、子どもたちの抱えているストレスの全体像が大きくかわらないことが予想される。つまり、令和4・5年度の取り組みは一定の効果はあるが、子どもたちのストレスが多様化しているためにさらなる対応が必要であることがわかった。また、もっと多くのストレスを取り除こうとすれば、現在の教育課程や学校の枠組みをまったく無視した学校（不登校特例校）が必要であることもわかった。そこで、ストレスは完全に除去できなくとも、職員による支援を充実させることができれば、子どもたちの幸福度や満足度が上昇し不登校が減ると考え、支援の充実に重点をおいて取り組んだ。

5 学校の well-being を目指した取り組みⅡ（令和6年度の取り組み）

(1) 不登校になる生徒のスクリーニング抽出（不登校対策委員会）

資料2より、不登校になる生徒は1学期から不登校の初期と考えられる「ポツポツ欠席」があることがわかる。この傾向は2・3年生で新規に不登校になる生徒でも見られた。しかし、1学期に「ポツポツ欠席」のある生徒は全体の30%を超えていた。また、コロナ以降は休ませること、休むことに抵抗感がなくなりさらに増加傾向にあった。本校の規模を考えれば、単なる体調不良などによる欠席か、不登校の早期なのかを見極めなければ早期の対応や支援が難しい。そこで以下のスクリーニング項目により不登校の早期発見を行うことにした。

- ① 「ポツポツ欠席」がある。
- ② ストレスチェック(Cocolo)で高いストレス値を示している。
- ③ 学校適応度チェック(アセス)で適応度が低く、反転項目の値も小さい。
- ④ 職員や担任による肌感覚

この4項目を基本として、現在は登校しているが数ヶ月後に不登校になる生徒を、全体の約10%を目安に抽出した。



(2) 抽出した生徒を支援するためにチーム担任制を導入した。

日本で取り入れられている複数担任制の中には、業務改善の観点から一定期間担任をすれば、しばらくは担任業務を行わないといったシステムを取り入れている学校がある。しかし、本校が取り入れたチーム担任制は、子どもたちへの支援の充実に目的として、2学級に対して3人の固定した担任を配置し、担任業務を行わない日のない常時担任として活動するシステムを取り入れた。

(3) 担任による、抽出した生徒への積極的な声かけ支援

抽出した生徒の状況は、学習に高いストレスを感じている者、友人関係や家庭環境に高いストレスを感じている者など様々である。その子どもたちのストレスを軽減・除去するために、それぞれ異なった支援をしては、長期間にわたって継続していくことは不可能といえる。そこで、ストレス値が高いことを念頭に置いて、幸福度の上昇を目指して、各担任が1日に1回何気ない声かけをする取り組みを継続して行った。

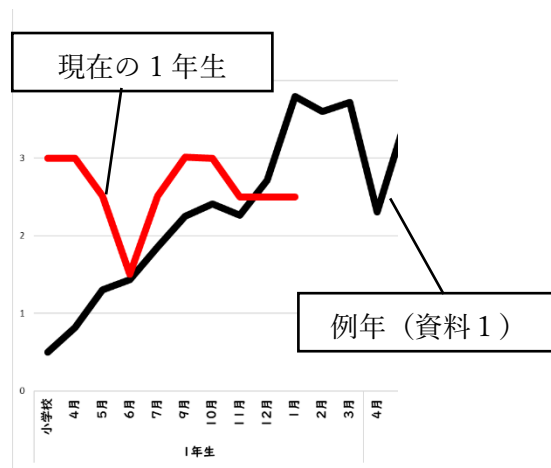
(4) 子どもたちを支援するためにパーソナルチューター制を導入した。

これは、複数の職員の中から懇談相手を子どもが選び相談をするというシステムである。

(5) 令和6年度の取り組みの結果

現在の1年生は、全国的な状況と同様に入学前から3%近い不登校児童が存在していた。例年であれば1月現在で全体の6%以上が不登校になっていても不思議ではない。しかし、令和6年度までの取り組みの結果1月末現在で2.5%の生徒が不登校であり、これは過去7年間で最も少ない値となっている。

職員の日々の取り組みが大きいことはいままでもないが、スクリーニングやチーム担任制が不登校対策として効果的に機能しているといつてよい。



6 学校の well-being を目指した取り組みⅢ（令和6年度の取り組み）

不登校の割合は減少したが、実際には30名を超える停滞期の生徒（引きこもりなど）が存在している現状がある。その生徒の多くはほとんど学びに向かえていない状況で、入学から担任が1度も面会できていない生徒も存在している。その状況を何とかしようと担任が家庭訪問や連絡を繰り返しても、中学校の場合は夕方18:00以降や夜になり、過度な負担となり、継続して行うことは難しい状況がある。そこで、授業時数0の職員（県のデータ活用加配）を配置し、日中の家庭訪問を実施することにした。

(1) 担当による日中の家庭訪問回数

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月
12	51	49	28	12	38	45	52	41	51

(2) 家庭訪問の結果

共働きや様々な家庭の事情により、日中を生徒が一人で過ごす家庭がほとんどとなっている。そのような状況の中、日中の家庭訪問を行うことは、昼夜逆転し生活リズムが乱れがちな生徒へ刺激を与える、不安を抱えながら過ごす生徒へ安心感を与えることができる。また、学習に対して不安を抱える生徒への支援となるなど多くの利点があったと感じている。

特に、登校意欲はあるもののなかなか一歩を踏み出せなかった生徒や、学習に対して意欲のある生徒たちが少しずつ登校するようになってきている。また、現状としては家庭訪問でもなかなか面会できない生徒もいるが、担任による家庭訪問に加え、担任以外の教員の定期的な支援が生徒の孤独感を和らげることに繋がっていると実感している。今後も継続していくべき取り組みである。

7 研究のまとめや課題

Well-being を目指した不登校対策を行ったことで、問題行動も平成30年の年間553件から令和5年度は年間232件にまで減少した。これは非常に大きな成果だと考えている。また、取り組み成果が着実に現れていることで、職員の仕事に対する意欲や学校に対する評価（学校評価）も向上した。

しかしながら、スクリーニングによる抽出は正確だが、判定のための会議に時間がかかることや、子どもが行うストレスチェック等にも時間がかかる。この両方がもっと簡単に短時間でできるような工夫改善をしなければ、継続が難しくなることが予想される。また、不登校担当による家庭訪問は、停滞期に入った子どもや保護者の安心につながっているだけでなく、他の職員からの評価も高い。しかし、現在はうまく機能している、職員が1人で活動しているので、情報共有も含め改善していかなければならない部分は残っている。今後、継続可能な活動にしていくための組織連携や工夫改善が課題となっている。